

巻・頭・言

# 住民と行政の 橋渡し役にな りましょう

私は昨年4月より道北技術士会の代表幹事を拝命しました大原と申します。私事2年前に34年間勤めた道職員を退職して、実家のある旭川市に定住しました。公務員(土現)時代は主に道路事業や支庁の耕地課、災害業務に携わり多くの人との出会い、皆さんに支えられ北海道のインフラ整備の一端を担うことが出来たと思います。特に、北海道各地での生活や見学(無料の離島観光?)が出来たことは道職員ならではの特権でしょう。

道北技術士会の歴史を紹介すると、昭和63年に地方協議会と設立し、平成18年度から道北技術士会として、現在稚内・留萌・深川の技術士(技術士補を含む)約80名の会員を有し、活動としては総会時の懇親会、現地見学会、他機関のシンポジウムの協賛などで、参加人員も20~30名と少数精鋭で実施しております。特に昨年度は旭川市からの「モンゴル国(ウランバートル市)への専門家派遣」の派遣要請に応じて、当技術士会の会員(私も含めて)を派遣させて頂き、経済発展途上国の課題(環境問題、都市開発、焼き肉のおいしさ、寒さetc)など貴重な経験をさせて頂きました。

今回の投稿に先立ち、昨年の東日本大震災及び大津波の未曾有の災害により、東北、関東を中心に多くの方が罹災されておられます。被害に遭われた皆様に、心よりお見舞い申し上げますとともに福島原子力発電所の事故に伴う放射能汚染が一日も早く終焉することを祈っております。

この大震災による津波の大きさや原発事故(放射能汚染)は、今まで、「安全」の上にあぐらをかいて「起こるはずのない」、「想定外」のことが起こってしまったという逃避とも受け取れる言葉で置き換えられそうです。

大原 治(おおはら おさむ)  
技術士  
(建設/農業/総合技術監理部門)

日本技術士会北海道本部  
道北技術士会代表幹事



ここで、技術士たるものがどうあるべきか、この経験や現実から何を学び、どのように次の世代に伝えていくかを考えること(復興の鍵)は技術士の真骨頂である。そして「住民と行政との橋渡し役に」になることではないかと思えます。

私が長い間の行政に携わった経験から感じるのですが、行政の担当員は住民と接することが苦手な人が多いのではと思います。私も若い頃に、事業の説明時に凶面を投げられたり、半日も説教されたりした経験があります。行政側も公共事業の増加に伴い押しつける傾向もありましたが住民も主義・主張を通そうとする傾向もありますが住民に対して工事の実施に伴うリスク、費用対効果や事業の必要性の説明が不足していた様な気がします。

近年の世相(国民の生活)を考えると、自由民主主義の発展による生活水準(飽食)やネット社会(IT情報技術)の向上に伴い「○○がある(できる)当たり前の社会」に向かう一方、頼る人のいない「孤族」がひしめき、人の絆が失われて来ていると言われてい

ます。また、政治の社会では財政悪化が進む中、与野党は対立に明け暮れるばかり、政治が災害などの対応力を失い、社会を閉塞感が覆ってしまっているような気がします。そこで、技術士の役割としてインフラ整備における維持管理(LCC)、施設のメリット・デメリット、費用対効果、環境への影響などの検証は当然のことであり、それに加えて住民に親しまれるインフラを作るための住民との協働や住民参加型の道普請、川普請などの手法を行政の一端として協力出来ればと思っております。今後、道内高専及び寒地土研との協力協定を踏まえ技術士の活躍の場が増えることを期待します。